竜宮の犬

宮原晃一郎

青空文庫

或田舎に貧乏な爺さんと、婆さんとが二人きりで暮してをりました。耕す畑も田もないから、仕方なく爺さんは楊枝、歯磨き、洗粉などを行商して、いくらかのお銭を取り、婆さんは他人の洗濯や針仕事を頼まれて、さびしい暮しをつゞけてをりました。

　すると或年の秋も末になり、紅葉が綺麗に色づき、柿の実があかく熟れて、風の寒い夕方、爺さんが商売から帰り途に、多勢の人が集まつて、何やら声高に罵り騒いでをりますから、何だらうかと一寸覗いてみますと、一羽の年寄つた牝鶴が、すつかり羽をいためて其処に降りてゐるのでした。集つた人達はその鶴を捕つてやらうとしましたが、皆めい〳〵自分こそは真先に見付けたのだから、自分が捕るのが当然だと言ひ張つて、果しがつかず、ガヤ〳〵と騒いでをるのでした。爺さんは慈悲心の深い人でしたから、これを見ると可哀さうで堪らなくなりました。そこで爺さんは人混みを押分けて前に出て申しました――

「マア〳〵皆さん、ちよつと私のいふことを聞いて下さい。一体鶴は千年の齢をもつといふものですから、この鶴は未だ〳〵永く生きのびることが出来ます。それだのに、あなたがたがこれを捕り、殺して喰べたところで、たゞ一時おいしいと思ふだけで、何にもなりません。又これを他人に売つたところが大した金にもなりません。そして買つた人は矢張りそれを殺して喰べるでせう。そんな殺生をするよりか、これを助けて、逃がしてやつた方が、立派な功徳になります。どうぞこの鶴は私に売つて下さい。私はたんとお金も持つてはゐませんけれど、今日の売り溜めを皆あげますから、それを、あなたがた、この鶴を見付けた人達の間で分けて、鶴は私に下さい。若し又それでもお銭が足りないなら明日の夕方まで待つて下さい。」

　爺さんが言葉を尽して説くものですから、その人達も納得して鶴を爺さんに売つてしまひました。

　爺さんは「これは善いことをした。」と、嬉しく思ひながら、その鶴をもつて家へ帰りました。

「婆さん〳〵。今帰つた。今日は売り溜のお銭は一文も持つて来なかつたが、その代り迚も幾百両だしても買へない善いお土産をもつて来た。何だか当てゝみなさい。」

　爺さんは鶴を入れた風呂敷の包みをとかずに、かう言ひました。

「さあ何だらうね。」と、婆さんは小首を傾けました。「私にはさつぱり見当がつかないよ。」

「これさ、この鶴だよ。」

　爺さんは風呂敷の中から、羽をいためたよぼ〳〵の鶴をそこへ出しました。鶴は驚いたやうな眼つきでそこらを見廻しました。

　婆さんは思はずアッと叫びました。

「オヤ〳〵爺さん、お前さんはマア気でもちがやしないか。鶴なんかを持つて来てさ。」

　爺さんはニコ〳〵して、

「気なんか少しもちがつてはゐない。これにはわけのあることだ。」

と、それから自分が行きがかりにその鶴を救つて来たことを詳しく話してきかせましたので、婆さんも同じく慈悲深い性質でしたから、成程そんな訳だつたかと、その晩は自分達の喰べるお粥を分けて喰べさせ、家の片隅にとまらせました。

　一月あまりもかうして養つてをりました。すると鶴はいためた羽

もすつかり直つて、自由にとべるやうになりました。そこで或日、爺さんと婆さんとは、鶴にかう言ひました。

「さあお前もすつかり丈夫になつたから、お前の好きなところへ飛んでいつてもよろしい。けれどもさう言つたからつて、是非出て行きなさいといふのぢやない。お前が此処にゐたければ、何時までゐたつてかまやしない。それは、お前の心まかせなんだ。」

鶴は幾度も頭を下げて、眼から涙をながしてをりましたが、軈て悲しい声を出して、羽搏きすると同時に、空に舞ひ上りました。そして幾度も家の上をまはつて、名残りを惜みながら何処かへ飛び去りました。

月日の経つのは早いものです。鶴が去つてから一月経ちました。するとその晩遅くなつてから戸を叩くものがありますから、爺さんが起きて開けてみますと、天女といふやうな美しい、気高い十八九の美人が巻物を手にもつてそこに立つてをりました。白い真珠色の衣服の袖口には、広い黒天鵞絨のやうなものでふちが取つてあつて、頭には紅い絹で飾りをつけてをりました。

「おぢいさん、おばあさん。しばらくでございましたね。」と、その女は懐しさうに申しました。お爺さんは不思議さうに、

「へえ、どなた様でいらつしやいますか、とんとお見忘れ申しました。どうぞ御免下さいませ。」と、ペコ〳〵頭を下げました。

美人はにつこりしました。

「おやもうお忘れですか？　なる程姿が変つてをりますから無理もありません。私は一月前まであなたがたに飼はれてをつた鶴でございます。どうも命を助けていたゞいた上、なみ〳〵ならぬ親切なお世話を受けまして、ほんとに有難く思つてをります。実はあの時分王様のお猟にゆきあひまして、その時鷹に羽をいためられましたが、やう〳〵あすこまで逃げて、田の中の畦へ降りますと、若い者に見付かつて、あぶなく殺されるところでした。そこへ丁度おぢいさんが来て助けて下さつたのでした。私は七夕様の織女でございます。丁度天の川の向うまであの日はお使ひに参つたところでございましたので、私が帰るのが遅いと、御主人様は大そう心配していらつしやいましたが、私が帰つて詳しくお話を致しますと、御主人様は大悦こびで、それではその御礼に、おぢいさん、おばあさんに天の羽衣を織つて、御礼にあげなさいと、仰いました。そこで私が心をこめてこれを織りました。で、どうか十二月三十日の夜に、天の羽衣、鶴の羽衣と言つて、売つて歩いて下さいまし。その代金は御二人が生涯たのしく、お楽に暮していかれるだけはございます。どうぞ随分とお身体をお大事に、いのち長くお暮しなさい。」

鶴の美人はさう申しまして、この天の羽衣を渡して、立ち去りました。

と、二人は夢から醒めました。然し鶴の美人が手にもつてゐた巻物は確にそこに置いてありました。

さて十二月三十日の夜になりますとお爺さんは鶴の美人に教はつたとほりに、

「天の羽衣、鶴の羽衣。」と、いつて売つて歩きました。

「天の羽衣とはどんなものか、一寸見せなさい。」と言つて、見るものもありました。けれどもそれは一寸見たゞけでは只真白な絹布のやうに見えました。

「なんだ、こりや白羽二重ぢやないか。こんなものが何で天の羽衣

だ。」

その人は嘲り笑つて立ち去りました。すると又一人の女が見せてくれと言ひますから、出してみせますと、かう申しました——

「マア珍らしく奇麗だこと、そしていくらで売らうといふのだね。」

「えゝ千両で売り度いと存じます。」

「マア途方もない！　せめて十両ぐらゐなら私も買つてみようけれど……」

その女は驚いたふうをして立ち去りました。こんな工合で、一日中売つて歩きましたけれど、誰も買つてくれる人がありません。お爺さんはガツカリして、とある海岸までくると、かう思ひました——

「えゝ天人のものなんかは地の人間が買やしない。私達がいつまで之をもつてゐたところが何の用にもたりないから、いつそのこと是は竜宮様へ差し上げてしまへ。」と、海の中へ天の羽衣を抛り込んで、さつさと家へ帰り、床に入つて、寝てしまひました。すると間もなく戸口で鈴をかけた馬の音が聞えて、それが立止まつたかと思ふと、誰やらがトン〳〵と叩きます。

「どなたですか今頃戸をお叩きなさるのは？」と、爺さんは睡い眼をこすり〳〵申しました。

「こちらでせう、慈悲心正助さんといふ方のお家は？」

「え、さうですよ、あなたはどちらからおいでになりましたか？」

「一寸、此処を開けて下さい。さうすればお分りになります。」

婆さんもその物音に目を醒しました。そして起きて戸を開けてみますと、吃驚して、思はずアッと言つて、尻餅を搗くところでした。といふのは、其処には一疋の竜の駒（たつのおとしご）の大きなのが、金銀、珊瑚、真珠などの飾りのついた鞍を置かれ、その上には魚の形をした冠に、鱗の模様のついた広袖を着た美しい女が立つてをりました。

お婆さんはすつかり驚いてしまひました。

「ぢいさん〳〵大変なものが舞ひ込んだ。お怪けが来た。早く此処へ来て戸を閉めて下さい。私は恐くて、もう足も腰もかなはない。」とお婆さんは呶鳴りました。

お爺さんもびつくりして飛び起きてくるとこの有様でした。けれども流石に男だけに、気を落付けて訊きました——

「もし〳〵お姫様、あなたは何だつて此処へおいでになりました。そして又この慈悲心正助に何の御用がおありなさいますか？」

竜の駒の背中にのつた美しい女は答へました——

「ちつとも恐がることもなければ、吃驚なさることもありません。私は竜宮から来た使者でございます。正助さんを竜王さま、乙姫さまが御召でございます。どうぞ御面倒ですが、一寸私について来て下さい。」

正助爺さんは、初めは少々恐がつて、一緒に行くことを躊躇しましたが、道案内が、か弱い女のことですから、何でもなからうと安心してその女について海岸まで参りますと、そこには別に一疋のもつと大きな竜の駒がをりまして、正助爺さんを乗せ、竜宮のお使ひを先に立てゝ浪の中へさつと駆け込みました。すると不思議なことには正助爺さん達の行く処は、まるで壁で仕切りをしたやうに海の水が両方に分れて、陸を行くのとちつとも変りがありません。驚いて後を振り返つてみますと、そこはもう水ばかりで、白い浪が物凄いやうに吼えたり、噛み合つたりして、岸の方へ押掛て行くのが見

えました。

おほよそ二三十丁も来たかと思ふと、突然眼の前に立派なお城が見えました。近づいてみますと、門には竜宮といふ字を真珠を熔かして書き、それを紅珊瑚の玉で縁取つた素晴らしい大きな額をかけて、その中には矢張り鱗模様の着物に、魚形の冠を被つた番兵がついてをりました。

正助爺さんはこの門を通つて、お城の中へ参りましたが、その美しいのに恍惚として、危く竜の駒から落ちようとしたことが幾度あつたか知れません。

とある玄関で駒をすて、迎へに出た女官につれられて立派なお坐敷に通り、暫く待つてゐると、竜王と、乙姫とが沢山な家来をつれて其処へおでましになりました。

「これ正助。」と竜王は仰せられました。「お前が夕方私にくれた天の羽衣は、この乙姫が前から手に入れようとして、どうしても求めることの出来なかつたものぢや。それがお前の殊勝な心掛で計らずも手に入つたので、乙姫は勿論、わしもことの外満足ぢや。何はなくとも先づ一献過せ。」

そこで大変立派な御馳走が出まして、正助爺さん、すつかりいい気持に酔つて夜の更けるのも知りませんでしたが、そのうちに東が白んで来ましたので、やうやく気がついて、お暇乞ひを申しますと、乙姫は侍女にいひつけ一つの美しい箱を持つて来さしました。

「正助や。」と、乙姫は申されました。「この箱には一疋の犬が這入つてゐる。これはお前が天の羽衣を私に贈つてくれたお礼です。侍女から、よくその養ひ方を教はつて行きなさい。」

正助爺さんは有難くお受け申して、又もとのとほり竜の駒に乗つて海岸まで送つてもらひました。その時侍女は、かう申しました——

「この犬には毎日小豆を五合づゝよく煮て喰べさせてお置きなさい。さうすると夜中に糞の代りに五合だけの黄金をします。だけれど五合以上は決して喰べさせてはなりませんから。そこはよく気をおつけなさい。」

成程、侍女が教へたとほり、五合の小豆をよく煮て喰べさせますと、その犬は夜中に五合だけの黄金を出してゐましたから、爺さんも婆さんも一寸の間に大金持になりました。けれども無慾で慈悲心の深い人達ですから、さうして取つた黄金も隣近所の貧乏人なんかに多くは恵みますから、人は皆この二人の年寄を褒めないものはありませんでした。

ところがその隣りに一人の名高い強慾婆さんがをりました。慈悲心正助のうちが俄に大金持になつたのに不審を抱き、或日、その家へ行つて、どうしてそんなに金持になつたのかと訊きました。慈悲心正助は正直なものですから、すつかり打明て話しますと、それぢや私にその犬を二三日貸して下さいと、慾張婆さんが申しました。

「えゝお安い御用です、さあどうぞお持ちなさい。」と、正助のところでは快く犬をかしてやりました。

然し二三日どころか五日経つても、又六日経つても犬を返して来ませんので、取りに行つてみると、慾張婆はひどい見幕で呶鳴りつけました。

「お前達は大うそつきだ。黄金を出すどころか、したゝかに糞をしたので、私は腹が立つて火吹竹でどやしつけたら、死んでしまつた

から、裏の掃溜に棄てゝしまつた。」

「おや〳〵ひどいことをしますね。そんな筈はありませんが、お前さん、私の言つたとほり五合の小豆を煮て喰べさせましたか？」

「そりや小豆を煮て喰はしたさ。けれども二三日借りたきりのものだから、そのうちにウンと黄金を取つてやれと思つて、一升喰はしたんだ。そしたら一升だけ糞をたれて、本当にひどい目にあはされた。」

「あゝそれぢやあいけない、五合以上喰べさしちやならないのだ。犬は可哀さうなことをした。どれ、では死骸でも葬つてやりませう。」

そこで正助爺さんは掃溜の中から犬の死骸を拾つて、綺麗に洗ひ浄め、それを土竈のさきへ埋めました。すると直ぐそこから榎が芽を出して、正月の十七日にはその枝に沢山の大判小判の金貨がなりました。正月にかざる繭玉の由来はこれだと申します。

青空文庫情報

底本：「日本児童文学大系　第一一巻」ほるぷ出版
　　1978（昭和53）年11月30日初刷発行
底本の親本：「竜宮の犬」赤い鳥社
　　1923（大正12）年5月
入力：tatsuki
校正：鈴木厚司
2005年8月21日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

竜宮の犬

宮原晃一郎

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/